

中世インドにおける神学論争 —神の存在を巡って—

加藤 隆 宏

東京大学大学院人文社会系研究科 助教

緒 言

本研究「中世インドにおける神学論争—神の存在を巡って—」は、16世紀頃に活躍した思想家マドゥスーダナ・サラスヴァティーの手による小作品『イーシュヴァラ・プラティパッティ・プラカーシャ』（*Īśvarapratipattiprakāśa* 『主宰神についての正しい理解に導く書』、以下IPPと省略）の解説を通じて、中世インドに起こった神の存在を巡る論争を明らかにすることである。

インド思想史は論争の歴史である。正統派バラモン教の六派哲学、非正統派の仏教やジャイナ教など、各学派は自説を擁護し相手を論破するために理論を強化し、論争を通じてそれぞれ学説を発展継承させてきた。その思想上、最もよく議論されたテーマの一つに「神は存在するのか」という問いがある。本研究で取り上げるIPPは、まさにこの問いを巡って当時の思想家たちの間に起こった論争の一断面を克明に記録するものである。

本書の著者マドゥスーダナは、シャンカラを始祖とするヴェーダーンタ不二一元論派に属する思想家で、同派の教義書を数多く残しているが、そのうちの 하나가IPPである。このIPPにおいてマドゥスーダナは、神の存在というテーマについて、唯物論、仏教から論理学派、ヴィシュヌ教の教説に至るまで、当時の思想界に影響力を持っていた各学派の学説を一つ一つ検証して論破し、最終的に自説であるヴェーダーンタの教説を展開している。このような構成を持つ本書は「諸学説綱要書」（doxography、学説誌）と呼ばれる形式を保ち、各学派の教義理解に大いに資するものであるばかりか、議論の応酬を当時のままに記録する貴重な文献資料としての価値も極めて高い。特に、「神の存在」というトピックに絞られた本書は非常に簡潔でありながらも、各学説の要点をおさえており、インド思想研究の入門書としてもふさわしい性格を兼ね備えている。

研究方法

1. 検索可能電子テキストデータベースの作成

本研究遂行のためにまず最初に着手したのが、テキストデータベースの作成である。検索可能なデータベースは、その後の翻訳作業、註記・インデックス等作成のために不可欠である。近年、世界各国のインド学研究者が地道な努力を続け、サンスクリット語文献のデータベース化を少しずつ進めている。本研究もこれに続き、IPPのデータベース化を行った。完成したデータベースは、当該分野および関連分野の研究者がこれを利用できるよう、web上に公開する予定である。

2. テキスト情報の確認

本研究で取り扱う1921年に出た初版本については、編集者が用いた写本がインド・ケララ州トリヴァンドラム（ティルヴァナンタプラム）大学に2本存在する。写本の複写は現地入手が原則であるため、筆者が現地に直接出向くか、あるいは他の研究者の協力を得て、可能であれば複写を入手する予定であったが、今回の研究ではこれらの写本資料を参照することができなかった。本研究はテキスト校訂を行うものではないが、本文を読み進める過程でテキストの不備を数多く発見した。これらの不備については写本などを参照して異読の可能性を検討する必要があるだろう。これについては今後の課題としたい。

3. 訳語の選定と翻訳作業

本研究の中心的な部分がIPPの和訳作業である。当該分野における先行研究を踏まえて慎重な訳語の選定を行い、正確な文献読解に基づいて翻訳作業を行った。IPPは「諸学説綱要書」という性格をもち、当時の諸学派の学説の要点を記録している。これら諸学派の学説部分については、それぞれの研究分野の専門家と連携しながら作業を進めた。具体的には、国内の研究者に関しては、

ワークショップなどを開いて意見交換などを行い、国外の研究者に関しては、メールなどの手段によって情報交換を行った。

4. 註記・インデックス等の作成

和訳作業と並行して、註記の作成を行った。学術的な観点から、より詳細な説明が必要となる箇所に註記を付した。本研究で扱うIPPは各学説を簡潔まとめた綱要書であり、インド思想(史)研究の入門書として今後の活用が期待される。したがって、インド思想を理解するうえでの前提知識となるような情報についても、可能な限りこの註記に盛り込んでいき、翻訳書を手に取った初学者でも理解ができるような体裁を整えることを心がけた。また、IPPには他の哲学文献からの引用が多くみられるが、これらのソースを同定し、註記情報として加えた。同時に、文献内相互参照などについても、すべて註記に記載した。また、書名・人名・専門用語などを網羅したインデックスを付した。

考 察

以下にIPPの章立ておよび構成と各章の梗概を述べ、IPPの全体を概観したい。

・唯物論者の説 (IPP: p. 1, ll. 7—12.)

輪廻と業を否定し、現世のみの幸福をめざす。主宰神の存在自体認めない。

・仏教徒の説 (IPP: p. 1, ll. 13—19.)

ブッダという神を権威とする。彼らにとっての主宰神は、ブッダという一切智者の認識の連続というあり方で存在する。

・空衣派ジャイナ教徒の説 (IPP: p. 2, ll. 1—18.)

アルハット(悟りを開いたもの)を主宰神として認める。ジャイナ教の教説は、七句表示法を特徴とし、すべてのものが不確定であることが示される。

・中観派の説 (IPP: p. 2, ll. 19—21.)

すべてのものは言説不可能であり、主宰神もまた空にほかならない。

・非正統派の教説まとめ (IPP: p. 2, l. 22.)

以上の論者の説は異端なものではあるが、主宰神に関する何らかの教説を主張している。

・ヨーガ学派の説 (IPP: p. 3, ll. 4—18.)

煩悩・行為・行為の結果・行為の潜勢力によって影響されることのない、特殊なプルシャが主宰神である。そのプルシャは清浄な知を本質とし、一切智者であり、

一切に遍満し、常住な最高神である。また、この主宰神の存在は推論という認識手段によって成立する。

・ヴァイシェーシカ学派の説 (IPP: p. 3, l. 19—p. 4, l. 4.)

壺(作られたもの)と陶工(作り手)との関係に見られるように、この世界の作者としての主宰神の存在が推論によって知られる。

・ニヤーヤ学派の説 (IPP: p. 4, ll. 5—11.)

すべての行為の果報を差配するものとしての主宰神が推論によって成立する。

・パーシュパタ派の説 (IPP: p. 4, l. 12—13.)

パシュパティ(獣主)が主宰神である。このことは同派の伝承聖典より知られる。

・パンチャラートラ派の説 (IPP: p. 4, ll. 14.)

4つの顕現(vyūha)を本性とするヴィシュヌ神こそが主宰神である。

・ヒラニヤガルバ派の説 (IPP: p. 4, ll. 15—16.)

ヴィシュヌ神・シヴァ神といった姿もとるヒラニヤガルバこそが主宰神である。

・ブラフマン論者の説 (IPP: p. 4, ll. 17—18.)

有・知・歓喜というあり方を持ち、全知全能で、万物の質料因である最高のアートマンこそが主宰神である。この主宰神はウパニシャッド聖典によって知られる。

・サーンキヤ学派の説 (IPP: p. 4, l. 19—p. 6, l. 7.)

主宰神は推論という認識手段によって知られるとするヨーガ学派・ヴァイシェーシカ学派・ニヤーヤ学派の主張を排斥する。主宰神は天啓・伝承聖典によって知られる。

・ヴェーダーンタ学派の説 (IPP: p. 6, l. 8—p. 7, l. 6.)

主宰神は推論によって知られない。主宰神はそれ自身で自律的に存在し、聖典によってその存在が知られる。

・主宰神の特殊性について (IPP: p. 7, l—p. 8, l. 5.)

主宰神は無形相なものとは有形相なものに分けられる。無形相なものは純粋な精神、有形相なものは三グナからなるマーヤーの限定によってそれぞれブラフマー・ヴィシュヌ・ルドラの形相を取る。

・主宰神の様態について (IPP: p. 8, l. 6—p. 10, l. 3.)

主宰神はその他にも諸々の様態を取る。これらの諸様態が夢眠時と熟睡時のアナロジー等によって示される。

ま と め

本研究で取り扱ったIPPについては、サンスクリット原文の初版が1921年に出版されたほか、これに関する研究や翻訳は皆無であった。本研究の最大の成果はIPPを通読して翻訳および註記を作成することができたことである。これまでインド諸語を含め、いかなる現代語によっても翻訳されることがなかった本文の訳註研究は、今後の思想研究のための貴重な基礎資料となるだろう。また、IPPの研究を通じて、マドゥスーダナの当時行われていた中世インドの主宰神思想の詳細が明らかとなった。マドゥスーダナの属するヴェーダーンタ派のみならず、「神の存在」を巡る議論についてのIPPに記録された諸学派の学説要綱が得られたことは、今後の当該分野の研究に少なからず貢献すると信ずる。

思想家マドゥスーダナの活躍した16世紀頃のインドでは、イスラム王朝のムガル帝国がその勢力を北インドから南インドへと拡大せんとし、また、南インド各地ではポルトガルの宣教師によってキリスト教が広められつつあるという状況のなかで、当時の思想界も変革の時期を迎えた。外来の宗教思想に触れることとなった土着の宗教思想家たちは彼らの教義・学説を自ら省察する必要に迫られることとなったに違いない。もともと有神論的傾向をもつヴェーダーンタの学匠であったマドゥスーダ

ナが「神の存在」というトピックを取り上げたのも、キリスト教やイスラム教といった一神教を多分に意識してのことであろう。正統・非正統を問わず、当時のインドの諸学派が「神の存在」をどのように捉え、また、「神」をどのように理解していたかを探ることは、マドゥスーダナにとってはインド土着の思想家としてのアイデンティティを一つずつ確認していく作業に他ならず、最終的には、ブラフマンという究極の絶対者を中心とする一元論を自説として展開するその姿勢には、ウパニシャッドに始まる学統を継承する者の自負さえ感じさせるものがある。IPPを一人の思想家の小作品としてではなく、インド思想史上の変革期に現れた、数千年にも及ぶ伝統学説の集大成と捉えるならば、本研究の成果はより有意義なものとなるだろう。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より学術奨励金のご支援を賜りました。ここに記して、心より深謝の意を表明いたします。

文 献

The Īśvarapratipattiprakāśa of Madhusūdana Sarasvatī, ed. by T. Gaṇapati Śāstri, Trivandrum, 1921.